

今週の為替相場見通し(2023年2月27日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		133.92 ~ 136.52	136.52	134.00 ~ 137.50
ユーロ	(ドル)		1.0536 ~ 1.0704	1.0545	1.0400 ~ 1.0800
(1ユーロ=)	(円)		142.18 ~ 144.15	143.91	141.00 ~ 146.00
英ポンド	(ドル)		1.1928 ~ 1.2147	1.1940	1.1800 ~ 1.2300
(1英ポンド=)	(円)	*	161.17 ~ 163.76	163.01	160.00 ~ 165.00
豪ドル	(ドル)		0.6719 ~ 0.6920	0.6726	0.6600 ~ 0.7000
(1豪ドル=)	(円)	*	91.35 ~ 93.01	91.80	89.80 ~ 93.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 134.00 ~ 137.50 円

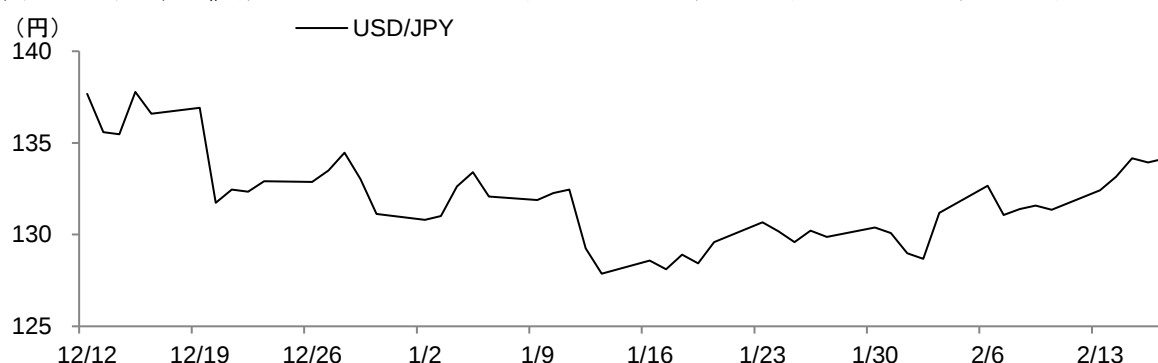
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、米金利上昇を受け上昇した。週初20日、134.34円でオープンしたドル/円は、米国休日の中、134円台前半で推移した。21日、ドル/円は米金利上昇を背景に134円台前半でじり高推移。米1月製造業/サービス業PMI(速報)がいずれも市場予想を上回ると、米金利上昇につれ135円台前半に続伸。引けにかけてはドルの戻り売りもあり135円付近で翌日へ。22日、ドル/円は米金利低下から134円台後半でじり安推移。海外時間は134円台前半に続落するも、FOMC議事要旨(2月会合分)で引き続きFRBの利上げ姿勢が意識されて反発し、134円台後半に値を戻した。23日、ドル/円は東京休場の中、134円台後半でレンジ推移。米新規失業保険申請件数が市場予想を下回ると、タイトな労働市場を意識した米金利上昇とともに135円台前半を試した。引けにかけては米金利が反転し、134円台半ばへ反落。24日、植田日銀新総裁候補の所信聴取における「現在の金融政策は適切」との発言が伝わると135円を目指し急伸するなど激しく上下。欧州時間では米金利上昇の流れで135円台に乗せ、米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想比上振れると債券安・株安・ドル高の流れが強まり、ドル/円は136円も難なく突破し、約2か月ぶりの高値136.52円で越えた。

今週のドル/円相場は、引き続きドル高・円安トレンドの継続を予想する。先週は、米景気指標・インフレ指標が軒並み市場予想を上回ったことで、市場では、FRBのタカ派傾斜への思惑から+75bpの追加利上げが織り込まれ、ターミナルレートも一段と上昇した。一方、日銀による早期の政策転換期待も後退していることから日米の金融政策の違いが意識されやすく、円売り・ドル買いが優勢となるだろう。今週は、相次ぐFRB高官発言や月初の米経済指標に注目が集まる。足許の米経済指標の堅調さを踏まえれば、FRBのタカ派色が強まると考えられる他、2月分の米経済指標も力強さを維持する公算が大きく、ドル/円上昇の流れに拍車がかかりやすい。一方、予想外に強い結果となった米1月雇用統計・小売売上高について、季節要因ではないかとの指摘もあることから、2月分の指標が冴えない結果となる場合には、ここ最近の強い指標が単なる季節要因の一時的なブレであるとの見方からドル売りが急速に進むリスクもあるため、ダウンサイドリスクにも注意が必要だ。今週の主な経済指標としては、28日(火)に米2月コンファレンス消費信頼感指数、1日(水)に米2月ISM製造業景気指数、3日(金)に米2月ISM非製造業景気指数などが予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/20~2/24)の値動き: 安値 133.92 円 高値 136.52 円 終値 136.52 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1) 今週の予想レンジ: 1.0400 ~ 1.0800 141.00 ~ 146.00 円

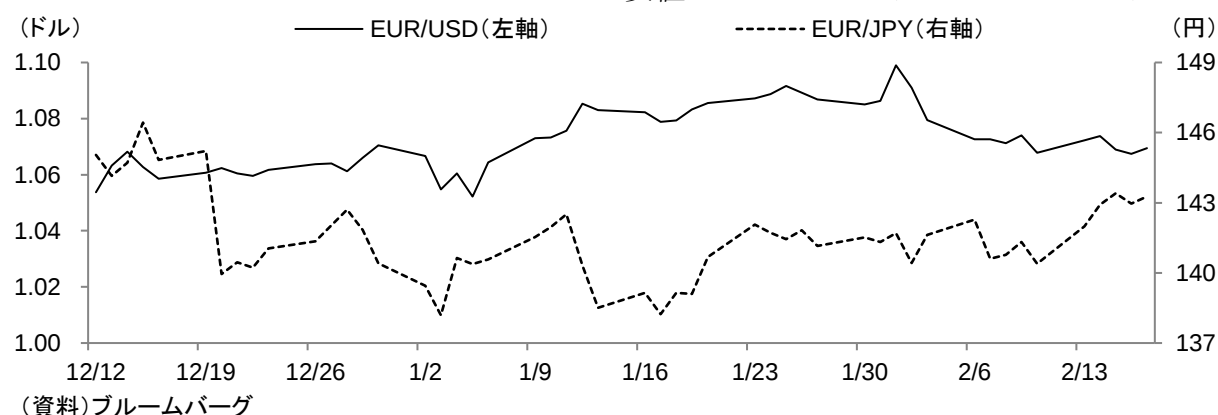
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、米金利上昇を受けて軟調に推移。週初20日、1.0684でオープンしたユーロ/ドルは、米国休場の中、1.06台後半を主としたレンジ推移となった。21日、ユーロ/ドルは米金利上昇を受けじり安推移。ロンドンフィクシングにかけては強烈なユーロの買い戻しから1.07を目指す場面も見られたが、堅調な米1月製造業/サービス業PMI(速報)の結果を受けたドル買いが重しとなり、1.06台半ばに続落した。22日、ユーロ/ドルは材料難の中、欧米金利差につれる展開も、FOMC議事要旨(2月会合分)を受けたドル買いを背景に一時1月6日以来となる1.05台に下落。23日、ユーロ/ドルは1.06台前半でじり高推移も、NY時間には欧米金利差拡大から一時となる1.0578に反落した。24日のユーロ/ドルは、米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想を上回ったことでドル買いが優勢となり、一時週安値の1.0536まで下落、その後値を戻し1.0545で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、ECBの利上げ継続観測で底堅い展開を予想。利上げを左右するユーロ圏のインフレ動向については、ユーロ圏消費者物価指数(HICP)のコアインフレ率が1月改定値で前年比+5.3%と過去最高を更新。またインフレに影響する雇用関連の指標では、ユーロ圏12月失業率が6.6%と最低水準となっている。ラガルドECB総裁は先週21日「賃金の動向をとっても注意深く見ている」と発言。また今月6日にはECB理事会メンバーであるホルツマン・オーストリア中銀総裁が「金融を引き締め過ぎるリスクは、引き締めが足りないリスクと比べると小さく見える」と発言している。ECBはタイトな雇用が賃金と物価に波及するスパイラル的なインフレに警戒感を示しており、賃金インフレの芽が摘まれたと判断できるまで、タカ派スタンスを崩すことはなさそうだ。次回3月会合での+50bp利上げは既に事前予告されており、焦点はその次の5月会合での利上げ幅となる。FRBが+25bpに利上げ幅を縮小、ECBがそれを上回る+50bpの利上げが続くようだと、ユーロが買われやすいとみる。また金利先物市場では、ECBが+25bp換算であと5回程度の利上げを見込んでおり、3回程度のFRB対比で利上げ余地大きいことも買い材料となりそうだ。インフレ動向に関心が集まるなか、今週の経済指標では2日(木)発表のユーロ圏2月HICP(速報)の結果に注目したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/20~2/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.0536 高値 1.0704 終値 1.0545
(対円) 安値 142.18 高値 144.15 終値 143.91



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.1800 ~ 1.2300 160.00 ~ 165.00 円

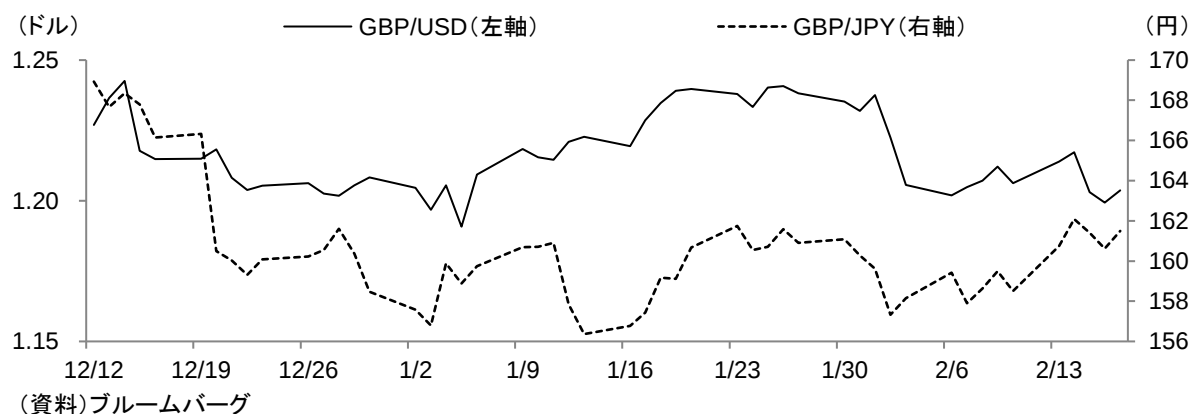
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、英米の経済指標で振れたものの、対ドルで下落。週初20日はNY休場に伴い薄商いの中、1.20台前半で方向感なく推移した。翌21日は英2月総合PMI(速報)が予想に反して好悪の基準50を上回ったことを受けて一時1.21台半ばまで上昇した。22日は英ポンド市場には目新しい材料がない中、独2月IFO企業景況感指数が予想をわずかに下回り、ユーロに連れ安。23日は東京市場の休場で再び取引閑散となり、じり安で推移。24日は米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが強い数値を示したことで全面的にドル高となり英ポンドも1.20を割り込んで下落し越週した。この間対円では、24日の日銀新総裁候補の植田氏の所信聴取での発言に注目が集まる中、概ね対ドルの動きに連れた推移。161円台で始まり、英2月PMI公表後に年初来高値となる163円台後半に上昇後、じりじりと161円台へ下落。24日は植田氏の発言のヘッドラインに振られたものの欧州時間のドル買い・円売りにつれて163円近辺まで再上昇し週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。先週は堅調な英2月PMIに市場の素直なポンド買いが見られたが、勢いが続かなかったのは想定内。基本的には米国発の動きの方が大きくなる。月初で各種指数が出てくる中とりわけ1日(水)の米2月ISM製造業景気指数と3日(金)の同非製造業景気指数に注目したい。とりわけドルは米国の底堅い経済を織り込んで推移しているため、逆にサプライズがあればドル売りにつながりやすい地合いでポンドの上方リスクとなる。なお、オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティはおおよそ上下1%程度の値動きを予想している模様。各指標のヘッドラインに振られる可能性はあるものの、趨勢を変えるほどのイベントは今週は想定しないといったところだろうか。またテクニカル面では1.19台の200日線が今年はサポートとして働いており同レベルでの攻防にも注目。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/20~2/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.1928 高値 1.2147 終値 1.1940
(対円) 安値 161.17 高値 163.76 終値 163.01



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6600 ~ 0.7000 89.80 ~ 93.30 円

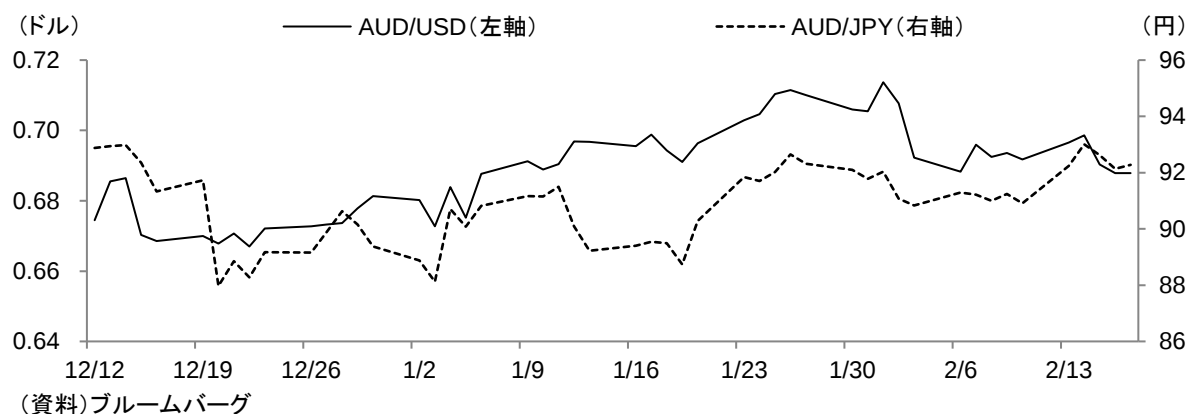
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は週初に0.6920の週高値を付け、週末に向けては0.6719まで下落した。20日、中国景気回復への楽観から上海株が昨年11月以来の上昇幅を記録し豪ドルは支えられた。21日、2月RBA議事要旨では、+25bp利上げに加え+50bpに利上げ幅を戻すかどうかとも議論されたことが判明。インフレがこれまでの想定よりも根強い可能性があることから、12月に議論された金利据え置きを選択肢は排除された。但し同日発表の米2月PMI(速報)は製造業・サービス業ともに予想以上に堅調な結果となり、米債利回りが上昇。米株は売りで反応し、豪ドルは下値を追う展開となった。22日、豪10~12月期賃金指数は前期比+0.8%/前年比+3.3%まで加速し10年ぶりの高水準となったものの、RBAの見通しや市場予想を下回る結果となり、豪ドルは売りが優勢となった。FOMC議事要旨(2月会合分)では「ほぼ全て」の当局者が+25bpへの利上げ減速に賛同したが、「数人」は+50bp利上げを支持したことが明らかとなった。更に「物価上昇率が目標の+2%に向けて低下していると確信するまで制約的な金融政策が必要」との意見も出るなど、物価が高止まりすればタカ派路線に回帰する可能性を示唆した。これを受けて米株は下落、米ドルは買いで反応。豪ドルは一時0.6795まで下値を拡げた。23日は0.68台前半を挟んでもみ合い。米新規失業保険申請件数が市場予想を下回り、底堅い労働市場の状況を示した事で米ドル買いが一段と強まり、豪ドルは0.6783まで下値を切り下げた。24日は0.6810でスタート後、米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想を上回る伸びとなった事を受け、FRBへの利上げ圧力が強まったとの見方から米金利が上昇、米株も反落した事から豪ドルは0.6719まで下げ、0.6726で越週した。

今週の豪ドル相場は、月末週となり、月末にかけては主に実需フロー中心の推移を予想する。主な経済指標は27日(月)に米1月耐久財受注(速報)、28日(火)に豪1月小売売上高、1日(水)にジョーンズ・RBA総裁補佐のスピーチ、豪10~12月期GDP、豪1月消費者物価指数、中国2月PMI、米2月ISM製造業景気指数、2日(木)に豪1月住宅許可件数等が発表予定。先週発表された2月RBA議事要旨では、+50bpに利上げ幅を戻すかどうかとも議論されていたことから、3月RBA会合を前に1日(水)のジョーンズ・RBA総裁補佐によるスピーチではRBAの見通しに関する新しい材料が出てくるか注意を払いたい。対する米金融当局は、物価目標に向けて制約的な金融政策がなお必要としており、メスター・クリーブランド連銀総裁は直近のPCEデフレーターに関して「インフレ率押し下げに向けFRBは政策金利を巡りもう少し行動する必要がある」という事実と合致するものだ」と語っている。両中銀のインフレ圧力抑制に立ち向かうタカ派度のバランスで3月の豪ドルの方向感が見えてこよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/20~2/24)の値動き: (対ドル) 安値 0.6719 高値 0.6920 終値 0.6726
(対円) 安値 91.35 高値 93.01 終値 91.80



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。